

青森県の弘前市岩木地区の一般住民健診での7年間でのHBV感染、HCV感染の経過

研究分担者：飯野 勢 弘前大学医学部附属病院 消化器血液免疫内科

研究要旨：青森県弘前市岩木地区の一般住民健診において2016年から7年後の2023年の評価では、HCVキャリアは存在しなく、HBVキャリアも減少し、共に治療を要する症例は存在しなかった。しかし、HBs抗原陽性者の中で、定期検査を受けていない例も少数存在した。肝がん年齢調整死亡率が全国的にも高い青森県において、肝炎ウイルスの撲滅に向けて引き続き、定期検査の必要性を当地域の医療従事者も含めて啓発し続けていくことが必要であると考えられた。

A. 研究目的

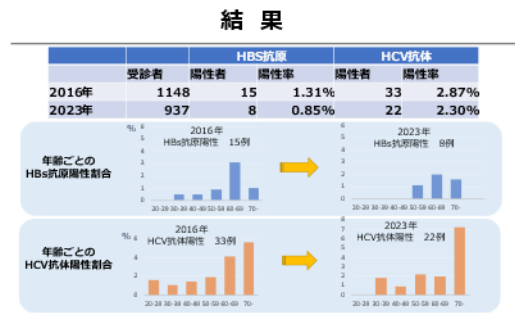
青森県では、75歳未満の年齢調整死亡率で肝がんの死亡率が上位を占めていたが、2021年に全国最下位となった。その要因の解明の一部として、青森県弘前市岩木地区での肝炎ウイルス感染について評価を行った。2016年での一般住民健診参加者1148人に対するHBs抗原やHCV抗体陽性者の現状をJDDW2016にて報告してきた。7年の経過でウイルス性肝炎がどのように変化しているかの評価を行った。

B. 研究方法

弘前市岩木地区で行った一般住民健診である岩木健康増進プロジェクトのデータの解析を行った。岩木地区は弘前市の西部にある人口10000人程の農村部で、成人対象者は9000人程である。2016年に青森県弘前市岩木地区の一般住民健診を受診した成人1148例（男性455例、女性693例）と2023年の成人健診受診者の937例（男性396例、女性540例）の比較を行った。2016年と2023年の両方ともに受診したのは510例であった。HBs抗原、HCV抗体陽性例については、当院診療録の調査を行った後に、全例に対して詳細に電話での聞き取りを行った。治療歴や通院歴がないものに対しては、当院への受診を促し検査を行った。

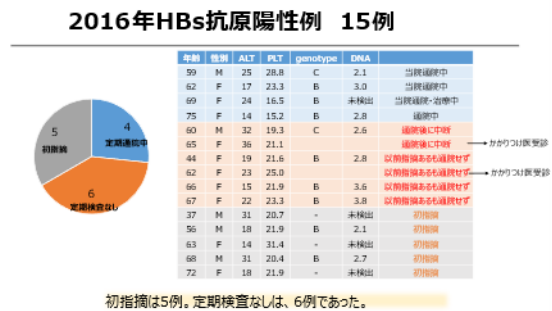
C. 研究結果

1. 2016年と2023年のHBs抗原、HCV抗体の陽性者




HBs抗原陽性者は2016年に1.31%、2023年に0.85%、HCV抗体陽性者は2016年の2.87%から2023年の2.30%と共に7年間で減少を認めた。年齢ごとの推移では特にHBs抗原陽性者は高齢に推移していた。

2. HBs抗原陽性例の詳細



2016年のHBs抗原陽性の中で初指摘は5例、定期検査なしは6例存在した。

2023年HBs抗原陽性例 8例



年齢	性別	AST	ALT	γGTP	genotype	DNA	2016年参加	備考
51	F	21	20	16	B	2.5	○	自己中断 受診
64	F	19	11	18	B	2.8	×	新規 自己中断 受診
55	F	19	21	15	不明	不明	×	新規 他院通院中
63	M	21	14	20	B	2.0	○	当院通院中
67	F	21	17	12	不明	不明	×	新規 他院通院中
67	M	21	20	23	C	2.4	○	当院通院中
73	F	20	18	16	B	2.2	○	当院通院中
75	M	19	21	31	B	1.7	○	当院通院中

自己中断が2例、初指摘は存在しなかった。

2023年のHBs抗原陽性例は8例存在したが、初指摘は存在せず、定期検査の自己中断例が2例存在した。これらは定期検査に結びつけられた。2016年と2023年ともにgenotype Bがほとんどで、いずれも肝障害を認めていない症例で核酸アナログ製剤を使用する症例は存在しなかった。

3. HCV抗体陽性例の詳細

2016年HCV-RNA陰性が確認できなかったHCV抗体陽性者



年齢	性別	現状	ALT	PLT	HCV-RNA
58	F	既知の放置	40	21.4	陽性
65	F	他院通院中	13	12.5	陽性
68	M	初めて指摘	16	21.9	陽性
69	F	初めて指摘	15	18.5	陽性
79	M	他院通院中	58	12.2	陽性
84	M	初めて指摘	37	15.4	陽性

- RNA陽性者の中で、初指摘が3例、通院中が2例、放置が1例であった。
- HCVの現感染者は6例で0.52%であった。
- 全例DAA製剤により治療を行いSVRを確認した。

2016年のHCV抗体陽性者は33例であったが、治療にてSVRが16例、未治療RNA陰性が11例で、RNA陽性が6例であり、全例DAA製剤にて治療を行った。

2023年HCV抗体陽性者（SVR確認できなかった5例）



年齢	性別	現状	ALT	RNA	2016年参加
34	M	初めて指摘	45	陰性	×
41	M	初めて指摘	24	陰性	○ 前回陰性
51	F	初めて指摘	14	陰性	×
73	F	初めて指摘	20	陰性	×
77	M	初めて指摘	28	陰性	○ 前回陰性

- HCVの現感染者は0/937例で0%であった。
- 青森県の岩木地区の住民健診参加者はウイルス性肝炎は減少し、治療を要する対象者は、ほとんど存在しない状況であった。

2023年のHCV抗体陽性者は22例存在したが、治療にて17例がSVRであった。その他5例は全例RNA陰性であった。これらの5例は抗体価もカットオフ値近傍であった。その中の2例は2016年検査ではHCV抗体陰性

であり、偽陽性であった可能性が高いと考えられる。2023年にはHCV感染では治療を要するものは存在しなかった。

D. 考察

一般住民健診において2016年から7年後の2023年の評価では、HCV感染者は存在しなく、HBV感染者も減少し、HBV・HCV感染ともに治療を要する症例は存在しなかった。また、HBV感染において東北地域はgenotype Bが多いことが報告されているが、本調査では、genotype Bが7割以上を占めていた。青森県の津軽地区は特にgenotype Bが多いことが示された。今回の検査によりHBs抗原陽性者の中で、定期検査を受けていない自己中断例の2例が定期受診に結び付けられた。

青森県では、75歳未満の年齢調整死亡率で肝がんの死亡率が上位を占めていたが、2021年に全国最下位となった。このような状況の中、ウイルス性肝炎は減少しているが、肝炎ウイルスの撲滅に向けて引き続き、定期検査の必要性を当地域の医療従事者も含めて啓発し続けていくことが必要であると考えられた。

E. 結論

一般住民健診において2016年から7年後の2023年の評価では、HCV陽性者は存在しなく、HBV感染者も減少し、治療を要する症例は存在しなかった。しかし、HBs抗原陽性者の中で、定期検査を受けていない例も少数存在した。肝炎ウイルスの撲滅に向けて引き続き、定期検査の必要性を当地域の医療従事者も含めて啓発し続けていくことが必要であると考えられた。

F. 研究発表

1. 発表論文

なし

2. 学会発表

飯野 勢, 佐藤 論, 遠藤 哲須, 櫻庭
裕丈 7 年間の一般住民健診における
HBV 感染、HCV 感染の経過 日本消化器病
学会雑誌 (0446-6586) 121 巻臨増大会
Page A805 (2024. 10)

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし